



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト



2016年 5月号

一院内の小さな声から一

はじめて入った処置室は、身長や体重を計測する為の機材が並んでいて、棚には、チューブやピンセットなどが消毒され個別に包装されて、子どもたちの不安とは無関心に綺麗に並んでいます。白い空間の中にピンク色のベッドがぽつんとあって、それが心細さを助長し、余計に緊張感を増していました。イギリスの病院の処置室には痛い処置をする時に子どもたちの恐怖を和らげる為、気をそらす様々なおもちゃ（ディストラクショングッズ）が置いてあるのだとFさんから教わりました。そこで、壁に棚を取り付けディストラクショングッズを収納することを提案しました。おもちゃを隠してしまわずあえて見えるようにすることで、処置室に入った子どもたちの意識がそっちに向かうようにと考えました。パッチワークの雲には一部ベッドと同じ色のピンクを使用することで、空間全体に柔らかなつながりを持たせました。Fさんが選んで購入したカモメは紐を引っ張ると羽ばたきます。現場の看護師さんからのアドバイスを受けながら選んだイスはこどものお尻のサイズに合わせて座面が選べ、しっかりと安定して処置することができます。



一ホスピタルプレイスペシャリストとの協働一

当院には「ホスピタルプレイスペシャリスト」の資格を持った保育士や看護師がいます。ホスピタルプレイスペシャリストとは医療環境をチャイルドフレンドリーなものにし、病児や障がい児が医療とのかかわり経験を肯定的に捉えられるようにするため、小児医療チームの一員として働く専門職です。その資格を持つ保育士のFさんが、ある団体から処置室改善の為の助成金を受けました。そして「子どもたちが怖がらない、入ってみたいと思ってくれるような処置室にしたいけれど、いろんな立場の人から意見を聞きながら進めたいと思っています。」と相談がありました。Fさんとは数年前、一年間一緒に研究したことがあります。その時は筋ジストロフィーの男の子の病室で、絵画を掛け替えたりおしゃべりをするのが男の子や家族に与える心理的影響についての研究でした。研究の継続には忍耐が必要な場面もありましたが、異業種間のコミュニケーションが柔軟な発想を呼び起こし、それが療養、治療の一助になったり、狭い病室内の硬質化しがちな親子関係を和らげることもあるということを実感させていただきました。そこで今回も全面的に協力させていただくことにしたのです。ホスピタルプレイスペシャリストを中心に医師、病棟看護師長、アートサイコセラピスト、私で現場視察や話し合いの場を持ち、処置室にふさわしいイスの形状や、痛みや恐怖から子どもたちの気をそらす為の「ディストラクショングッズ」の選定、収納方法、色彩計画などトータルにバランスを考えながら且つ、各専門家の視点も加味して空間を創造してゆきました。それは一歩進むごとに壁にぶつかるような作業でしたが、知恵を絞って壁をこえた時の嬉しさはひときわで、とても刺激的で楽しいものでした。壁画に描いたパッチワークの雲は、多くの医療スタッフや患者さんのご家族など、その場所に関わる人の手によって描かれました。これまで見向きもされなかった処置室でしたが、まずはちらっと見て、次に前をゆっくり歩いてそっと見て、それからおそるおそる覗く。という子どもたちを見かけます。

ねむり

作家名：富樫 奈月